



審査講評



山本理顕



「40坪の使い方」というテーマにしたのは、住宅を住宅としてだけではなく、都市や社会に対してどのような使い方をすれば今までと違う地域社会につながるか、その提案を期待してのものでした。しかし、住宅の範疇を広げる提案は少なかった。住宅単体で見ても、地域とのつながりを含めて、新たなあり方が今ひとつ見えなかったのが残念です。条件をつくることというのは、建築を設計していくうえで常にわれわれに求められていることです。敷地、プログラムをすべて与えられて、そのままデザインするなどという状況はあり得ません。このコンペは、デザインコンペではありますが、同時に社会に対してどういう批評をもっているのか、さまざまな社会問題をどう解決するのか、提案者自らが表明できる場でもあります。その視点を忘れず、皆さんの幅広い発想をこれからも期待しています。



藤森照信



僕は、これからの住宅のあり方で目指されるべき、つまり21世紀の住宅原型は難民キャンプであるといい続けてきました。それはこのコンペでもいい続けていることなのですが、今回の提案をいろいろ拝見し、改めてその思いを強くしました。近年の傾向として、住宅そのもののヴォリュームを小さくバラバラに分解して街にばらまく「分離派」が住まいの新しいあり方として出現しました。その後、2011年の3.11以降に絆や共同、コミュニティを大切にする考えがより強く住宅にも反映されるようになりました。この「分離派」とコミュニティへの意識がどうつながるかに注目していたのですが、今回はこれらふたつのことをつないでいる提案が多くて驚きました。特に岡山・森田案の「身の丈ハウス」は、20世紀にアンリ・ルソーは孤立しながらも、歴史上での魅力を失わなかった、という状況を彷彿とさせ、考えさせられました。プレゼンテーションもとてもよかったと思います。





千葉学



これまでの標準であった40坪というリアルな数字を与えることで、逆に住宅そのものが社会との関係の中でどう変わり得るのか、今の若い人たちの感受性の先にどんな生活像が描かれるのか、そこに期待していました。多くの提案が周囲とつながりを意識したもので、その点ではよかったです。一方でそのつながりがどこか形式的で、建築そのものの提案にまで遡及できているものは少なかったと思います。そんな中で、「延床表面積40坪の家」は、徹底的に建築にこだわって提案できることを見付けようとしている点に大変共感しました。「過ごしをシェアする家」も、旗竿敷地という、どちらかというあまり積極的な価値を見い出せてこなかった敷地から建築のあり方を立ち上げ、そこをコミュニティの核としていくもので、都市の制度そのものも変えていく力をもっていると思いました。このような提案は、建築に携わっている人にしかできないものです。今後も是非、「建築にできること」を考え続けていってほしいと思います。



松山巖



僕は東京の路地のある住宅街に住んでいますが、あまり人と人はつながりたくないものですよ（笑）。そういうことが夢みたいに思われていることが非常に不思議でした。若い人たちが暮らしている都市は狭いもので、いろんな意味で管理されています。制度や空間もそうですし、パソコンからサインから、記号に支配された世界にいる。それをひっくり返したい気持ちは分かりますが、ひっくり返すのは非常に難しいことです。その状況を認めたくないと、話が先に進まないと思いました。提案については、こうであればよかったのにと条件付きでよさが認められるものが多いですよ。質疑応答で話をしてみると分かる部分もあるけれど、パーフェクトな一石を投げられるものはありませんでした。できれば、積極的に建築をデザインすることから何ができるのか、その説得力を見たいです。



西村達志



第8回を迎えた本コンペは、建築に関わる若い方々の発表の場、そのためにエールを送る場にしたという関係者の熱い想いで続けて参りました。第5～7回は論文コンペと致しましたが、やはり皆さんに建築の提案を表現していただくには、設計アイデアコンペに戻すべきという見解から、満を持して今回改めてアイデアコンペとして再スタートすることに致しました。1次審査で、240点の提出作品の中から2次審査でプレゼンテーションしていただく7点を選びましたが、これといった強い提案が見られず、2次審査のプレゼンテーションを期待していました。今回、賞の決定も含めて考えますと、残念ながら傑出したものがなかったことも事実かなと思います。今回の結果も踏まえて、次回はさらに充実したかたちのコンペを開催できればと思っています。

